8/26 2005

Japanese Music Education Society News Letter

第 21 号 No.21

日本音楽教育学会 ニュースレター

目　　次

1　報告・お知らせ
　第 2 回常任理事会報告 2
　『音楽教育実践ジャーナル』特集原稿募集のご案内 7
2　全国大会・ゼミナールのご案内
　第 36 回全国（沖縄）大会のご案内 8
　第 8 回音楽教育（妙高）ゼミナール 10
3　海外トピックス
　特集：APSMER 2005 シアトル大会 11
4　国内トピックス
　日本音楽表現学会アクアブルー大会 14
5　会員の窓
　ニュースレターへの投稿のお願い 16
　会員からの情報，ニュース 16
　Letter to the Editor
7　その他 18

編集後記 19

平成 17 年度第 2 回常任理事会報告

日時：平成 17 年 7 月 10 日（日）14：00～17：30
場所：日本女子大学新泉山館 503 室（坪能研究室）
出席：今川，岩井，奥，加藤，小山，佐野，島崎，坪能，村尾（五十音順）
欠席：岩崎，阪井，降矢

【報告事項】

1．事務局から（小山事務局長）

(1) 会務報告（平成 17 年 5 月 16 日以降）

6 月 5 日 (日)　第 1 回学会誌検討委員会
18 日 (土)　『音楽教育学』35-1　念校
19 日 (日)　第 1 回学会運営検討委員会
22 日 (水)　第 36 回大会口頭発表締切
30 日 (木)　『音楽教育学』35-1 号およびニュースレターNo.20 発送

(2) 事務局員の契約について

2005 年 6 月 1 日付けで，事務局員の契約更改を行った。従来不十分であった就業条件について，労働基準法等に則って学会と事務局員との間で合意が成立し，雇用契約書兼就業条件明示書を作成して署名捺印を取り交わした。

(3) 郵送封入物について

封入物原稿は，ニュースレター発送の 10 日程度前を締切とする。封入物は原則として B5 版とする。

(4) 事務局業務の負担軽減について

事務局業務が過密で，時間外勤務が常態化している現状である。業務の見直しを進め，内容によっては外部委託やアルバイトによる業務補佐の可能性を探るが，事務局への業務依頼には，十分な時間的余裕を持ってほしい。

2．第 36 回大会関係

(1) ツアーおよびバスサービスについて（坪能会長）

今回は，会場へのバス輸送およびツアーの手配を行わないこととした。

(2) プロジェクト研究について（プロジェクト研究担当理事）

「新しい評価と音楽科の学力」（加藤副会長），「学力（低下）論争と音楽科」（村尾常任理事）についての進捗状況が報告された。

(3) 共同企画と個人発表（島崎企画担当理事）

・共同企画と個人発表の時間及び教室割り予定の概略，発表申込者が報告された。司会候補者も報告されたが，一部はまだ調整中である。
・共同企画については，「4 月末に応募締切」→「5 月の理事会で承認」→「応募者への連絡とプログラム原稿依頼」という流れであることが確認された。

3．妙高ゼミナールについて（小山事務局長）

ワークショップ 6 が中止となった。また，ラウンドテーブル 10 での発表者として予定され

ていた西田治氏，南田勝也氏，山岸清之進氏が不参加となり，新しく柴田夏乃氏（ヴォイス・セラピスト）が加わることとなった。

4. 各委員会報告

(1) 学会運営検討委員会

・村尾常任理事が委員長に選出されたことが報告された。

・村尾委員長より事務局体制についての「中間答申１」が提出された。

その骨子は以下の通り。

全体の改善方針と進め方

事務局員一人体制を維持し，局員の仕事量を削減する方向で改善する。実務的な事項は事務局長と事務局員が判断し，順次改善を進める。運営の本質にかかわる事項については，理事会に諮りながら進める。

具体的な改善内容

例会について

従来事務局が行っていた関東地区の例会案内発送を，関東地区理事が行う。

例会報告は，学会誌の様式により，担当者がメールの添付ファイルで事務局へ送付する。

この他に，学会誌編集および発送事務についても委員会からの意見が出されたが，この件については学会誌検討委員会の審議に送られることが，常任理事会で了承された。

その他

経費節減について

大会参加費振込み料は，参加者負担とする。また，司会者お弁当代の本部負担を廃止する。

(2) 学会誌検討委員会

・加藤副会長が委員長に選出されたことが報告された。

・加藤委員長より，第１回委員会の検討結果を坪能会長に既に中間答申として出している。坪能会長からの意見を受けて，さらに検討を重ねる予定。

第１回委員会の検討結果の概略は次の通り。

① 編集委員会の人数，学会誌の発行回数に関しては従来通りが妥当である。

② 毎号，編集委員の中から責任編集者を決めるなど，責任体制を明確にする。

③ 査読のあり方については，『音楽教育実践ジャーナル』投稿規程の一部改訂を提案する。（ジャーナル誌の投稿原稿種類の筆頭に「実践論文」を加える。原稿の採否に当たっては査読者の判断を求めることがある旨明記するなど。）

④ 編集委員会業務は事務局で行うのが適当であり，参事など若手に委嘱することは適当ではないと考える。

5. 国際交流委員会について（坪能会長）

奥忍氏，田中健二氏，小川昌文氏，塩原麻里氏，中地雅之氏の５名の委員で構成する。沖縄大会総会後に第１回委員会を開催し，委員長を選任の予定。

6. 会計収支の改善について

・会計担当理事（奥・今川）から，各担当者はそれぞれの予算枠を確認して業務にあたっていただきたい旨，要望が出された。

・坪能会長から，学会誌のバックナンバーをセット価格販売する計画の提案があった。

【審議事項】

1. 平成 18 年度予算案の一部修正について

平成 17(2005) 年度 第 1 回理事会において承認された平成 18 年度予算案の一部に数字の誤りがあることが判明した。奥・今川会計担当理事より以下の修正内容が提示され，承認された。

① 18 年度予算案収入の部・前年度繰越金額の記載間違いの訂正と，これに伴う計算の修正

②支出の部の「ニュースレター費」が小計から外れていたことにともなう計算間違いの訂正

2. 後援申請について

後援申請を受けて，以下のシンポジウムを後援することが承認された。

2005 年全日本電子楽器教育研究会シンポジウム～20 周年記念～

主催： 全日本電子楽器教育研究会

開催日： 2005 年 9 月 11 日

会場： ホテルパシフィック東京

テーマ： 電子楽器による音楽創出と人材育成

3. プロジェクト研究の費用の支出，ならびに今後の企画の仕方について

プロジェクト研究の予算 20 万円の支出について，今年度のプロジェクト研究 2 件については，それぞれ 10 万円を上限として経費を支給することが承認された。今後，プロジェクト研究を理事会企画として立ち上げていくことが確認され，各常任理事から企画を提案することとなった。会長は提出された企画をすべて常任理事会に諮り，常任理事会において審議，決定する。18 年度予算案は既にプロジェクト研究費 20 万円を計上しているが，承認された企画の数によっては補正予算を組む。

4. 役員交通費について

東京 23 区内在住の役員は，次回会議以降の交通費の支給を 1 回につき 1000 円とする（従来 2000 円）ことが承認された。東京以外に在住の役員に対しても，引き続き割り引き航空券の利用などの自己申告により，交通費の削減にご協力をお願いする。

5. 全国大会開催についての学会本部と大会実行委員会との覚え書き

原案を一部修正し，今年度と来年度の大会実行委員会に送付することが承認された。

6. 事務局業務の見直しに関連して

(1) 個人情報の取り扱いについて

会員名簿については，個人情報保護法への対応という意味からも今後の発行を取りやめる。会員の異動情報をニュースレターに掲載することも，取りやめる。

(2) 修士論文調査について

今年度から調査を廃止し，ニュースレターへの修士論文題目掲載を取りやめる。

(3) 会員の業績申告について

入力業務の負担軽減のため，今年度からメールで受けつける。申告結果は従来通り学会誌に掲載するが，博士論文については，レイアウト上別枠を設けて掲載する。

7．大会発表応募について

（1）応募締め切り期日について

毎年，個人発表の応募締切を「6月20日」に固定することと決定した。なお，共同企画についてはとりあえず「4月30日」とすることで合意し，今後必要に応じて検討する。

（2）応募の制限について

今回の個人発表応募の中に，1人で2発表という応募が2件あったが，1人1発表にしていただく方向で，本人に確認中である。来年度は，「筆頭発表者となれるのは1人1発表までとする」ことを応募要項に明記することとした。

8．新入会員及び退会者の承認

新入会員：下記の3249番～3288番までの40名を承認。

＜正会員＞

3249	夏目　佳子	愛知教育大学院生
3250	梶田　美香	名古屋市立大学院生
3251	若菜　直美	文化女子大学室蘭短期大学
3252	長谷川千鶴	東京芸術大学院生
3253	高田奈津子	京都府立洛北高等学校
3254	岡田　宏	横浜国立大学院生・神奈川県立横浜立野高校
3255	伊藤　知乃	千葉明徳短期大学
3256	樫下　達也	和歌山大学院生
3257	董　芳勝	創価大学
3258	山川　夏子	栗東市立　金勝小学校
3259	熊谷　文志	東北大学院生
3260	平田　千秋	品川区立清水台小学校
3261	天神原鶴久	福岡教育大学院生
3262	嶋津　敏	芝浦工業大学中学高等学校
3263	涌井千賀子	上越教育大学院生
3264	小澄　純	福岡教育大学院生
3265	川人有紀子	上越教育大学院生
3266	小島　章子	上越教育大学院生
3267	北村　勝朗	東北大学
3268	弓場　愛	オークランド大学院生
3269	宮原絵里奈	岡山大学院生
3270	田中　功一	国際学院埼玉短期大学
3271	北原　弘嗣	大町市立第一中学校
3272	熱田　遥	上越教育大学院生
3273	村上　早苗	上越教育大学院生
3274	佐々　真理	上越教育大学院生
3275	高橋真世子	岩手大学院生
3276	佐野　桂子	岩手大学院生
3277	千田　愛	岩手大学院生

3278　杉本　絵美　岩手大学院生
3279　荒田　奈美　岩手大学院生
3280　藤村　誠毅　岩手大学院生
3281　田口千紗都　岩手大学院生
3282　大石あゆ美　東京学芸大学院生
3283　伊藤　　玲　三重大学教育学部附属小学校
3284　野村　勝紀　美唄市立南美唄中学校
3285　渡辺　景子　北海道教育大学院生
3286　砂川　涼子　沖縄キリスト教短期大学
3287　小寺　香奈　東京藝術大学院生
3288　小方　圭子　赤間保育園

＜申し出退会者＞

0390　高田早穂見　芝浦工業大学中学高等学校
2157　本郷眞帆子
2943　宮本 美子　鶴川女子短期大学
0414　小林　満　桜花学園大学
2751　矢野 千鶴　西貴志小学校

＜ご逝去＞

1341　下山　進　千葉敬愛短期大学

7月7日現在正会員数1560名

『音楽教育実践ジャーナル』特集原稿募集のご案内

編集委員長　木村次宏

日ごと秋の気配が感じられる季節になってまいりましたが，会員の皆様はいかがお過ごしでしょうか。さて，編集委員会では，2006 年 3 月発行予定の『音楽教育実践ジャーナル』通巻 6 号の特集に向け，下記の要領で原稿を募集いたします。投稿に際して，書式，字数などは（とくに指定がない限り）『音楽教育実践ジャーナル』投稿規定をご覧下さい。なお，投稿の際には，原稿の表紙に「特集への応募原稿：『実践ジャーナル』通巻 6 号」と明記してください。採択された原稿については，来年 1 月末日までに編集委員会から投稿者に連絡いたします。

１．特集タイトル：「学校生活を支える音楽の課外活動（仮題）」
２．企画担当者：　北山敦康，嶋田由美，新山王政和
３．原稿締め切り：　2005 年 12 月 15 日（必着）
４．特集の趣旨：

学校教育の一環である吹奏楽や合唱等の課外活動は，教科としての音楽教育とともに戦後の日本の音楽文化を支えてきたと言っても過言ではありません。とくにここ数年，これらの活動をたんに課外活動として捉えるだけではなく，学校内音楽活動の中心的な存在として，さらに地域の文化活動の中核として活用していこうとする実践も見られるようになってきました。しかし，これまで本学会では，そういった課外活動としての音楽教育に焦点を合わせた研究が少なかったように思います。今回の特集では，教科指導とは違った学びや育ちの場としてそれらの実践をとりあげ，小中学校や高等学校だけでなく，幅広く幼稚園・保育園から大学のサークル活動までを対象にして原稿を募集することにしました。

５．募集原稿：

今回の特集では，次のような内容の原稿を募集いたします。会員の皆様の積極的な投稿をお待ちしております。

（1）課外活動における合奏（吹奏楽，金管バンド，弦楽合奏，リード合奏，箏曲合奏，打楽器アンサンブルなど）や合唱等（ミュージカルやオペラなども含む）の実践報告や指導法の研究。
（2）発展的な選択授業等における学校独自の取り組みによる合奏や合唱等の音楽活動の取り組みの紹介や実践報告など。
（3）幼稚園や保育園におけるリード合奏，マーチングバンド，太鼓アンサンブル等の取り組みの紹介や実践報告など。
（4）その他，この特集の趣旨に沿った課外活動等の実践報告や提案など。

全国大会・ゼミナールのご案内

eeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeeee

美ら島沖縄でお待ちしています

――第 36 回 全国 (沖縄) 大会 ――

2005 年 10 月 29 日（土)～30 日 (日)

会場：琉球大学（九州地区）

沖縄大会実行委員会

１．魅力いっぱいの沖縄企画

フォーラム：

「地域性を生かした音楽教育を考える

－オキナワの肝心を次世代へ－」

の内容につきましては大会プログラムを参照いただくとして，ここでは各解説者・パネリストの簡単な紹介をいたします。

現職の小学校教師である入里叶男氏は，80 年代はじめから三線教育に取り組んでいる郷土音楽の実践者のパイオニア的存在です。1998 年，LD 教材「必携・新しい”世界の音楽”学習への手引き」(山口修他著 ビクター）では『授業への展開』編でカンカラ三線の製作と郷土の音楽学習のモデルとして登場しています。「ハイサイシーサー」「子どもエイサー」など郷土色を生かした音楽作品の作詞・作曲者としても知られています。

平田大一氏は，小浜島出身で笛の名手。大学卒業後帰郷し，二十代でミュージカル「大航海」の俳優として全国デビューしましたが，一旦は故郷の小浜で民宿経営を手伝いながら島おこし運動に尽力します。その後，沖縄本島中部にある勝連町（現うるま市）のきむたかホール開館に際して芸術監督として招かれ，同町中高生たちのミュージカル上演活動を指導し，県内はもとより全国で公演活動を展開します。現在は浦添市，那覇市の青少年を対象とした舞台創造に取り組んでいます。

比嘉康春氏は，現代の沖縄で最も活躍する古典音楽演奏家のひとりで，沖縄県内ばかりでな，国立劇場（東京），紀尾井ホール（同）等本土各地や，海外での数多い演奏歴をもっています。独唱や合唱での演奏はもとより，とくに古典舞踊・組踊りの地謡としても豊かな経験を持ち，舞踊家の信頼が最も厚い歌い手の一人でもあります。また，洋楽とのコラボレーションにも積極的に取り組んでいます。

個性豊かな３名のパネリストを仕切るのは吉田孝氏。幼児教育からカリキュラム・授業論，コンピュータ，マラソンなど，音楽と教育全般に幅広い知見をもち，舌鋒の鋭さでは定評があります。

オキナワをフィールドに，今後の学校・地域における伝統音楽教育全般について大いに知見と議論を深める場になることでしょう。

一方「宮良長包パネル展」は，沖縄を代表する音楽教育家である宮良長包の人と業績を関連資料や出版物，音源や画像・映像など豊富な資料を駆使して紹介いたします。

パネル展は，これまでの全国大会では例を見なかった企画だと自負しています。長包研究家である大山伸子先生の企画・監修で美術関係者の方の協力を得ながら準備を進めております。こちらもご期待下さい。

２．昼食・懇親会も万全

昼食は，両日とも中央食堂にて，沖縄そばや沖縄料理を中心とした定食を用意しております。中央食堂以外に，徒歩圏で食事できる場所はございませんので，できるだけ中央食堂をご利用いただきますようお願い申し上げます。

懇親会では，琉球料理や泡盛はもちろん，沖縄の歌と踊りもご堪能いただけるよう琉球大学「琉球芸能研究クラブ」によるアトラクションも予定しております。多数の方の参加をお待ちしております。

３．安く手に入れる── 航空券や宿泊

沖縄は遠くて高い！という印象をお持ちの方が多いと思いますが，旅行社のツアーを使うと意外と安いものです。例えば羽田・那覇２泊３日で３万９千円（２名１室）～４万４千円（１名１室）程度，１泊３日のアレンジ（２名１室３万２千円、１名１室３万５千円程度）で予約をし，残りの一泊は自分で宿を探すともっと安くなります。各地の旅行社や駅には必ず沖縄旅行のパンフレットがあります。見比べて検討されるとよいかと思います。

前後一週間有効のバースディ割引を使うと，本人を含めて４名までが１万３千円程度(片道)ですみます。ビジネスホテルは１泊4000円程度，民宿は1500円程度からあります。

尚，この時期は修学旅行シーズンでもありますので，早めに予約を入れた方が無難です。

多少の情報提供はできますので，お気軽に大会事務局までお問い合わせ下さい。

４．若手の集い ── 院生フォーラムへ

一昨年，昨年に引き続き「院生フォーラム」を開催いたします。全国の院生を中心とした若手（自称も含む）のみなさんが集い，研究を交流する場です。

全国各地で多くの院生が音楽教育研究を進めています。修士論文を書いている院生だけでも年間130人以上になります。しかしながら，互いの研究について交流する機会は思いの他少ないものです。

沖縄大会の院生フォーラムでは「ポスターセッション」を企画しました。まとまった研究成果でもかまいませんが，むしろ中間報告を公開し合うことに，フォーラムのメリットがあると考えています。修士論文の中間報告の内容でもかまいません。自分の研究を発信することで，さまざまな示唆や情報を得ることができます。気軽にチャンレンジされてはいかがでしょう。院を修了された方も歓迎です。ポスターセッションを中心に，若手の研究交流の輪が広がることを願っています。

日　時　　10月30日（日）
　　11：30～12：30
場　所　　101室
申込先　　電子メールで申し込み下さい。
anmi0014@ybb.ne.jp（大石あゆ美）
※申し込みの際は，氏名，所属，連絡先，学年発表題目をご連絡下さい。
締　切　　９月３０日（金）
追って詳細は連絡いたしますが，
基本的に分量や書式は自由です。
担当者　　大石あゆ美
（東京学芸大学大学院修士課程
音楽教育専攻　音楽科教育コース）

沖縄大会実行委員一同，会員のみなさまに喜んでいただけるよう全力で準備を整えてまいりたいと考えております。沖縄大会につきまして，ご不明な点などございましたら，遠慮なく大会実行委員会（下記）までお問い合わせ下さい。

〒903-0213 沖縄県西原町千原１
琉球大学教育学部音楽教育教室
TEL/fax 098-877-7940
e-mail:tsuda@edu.u-ryukyu.ac.jp
津田 正之

妙高ゼミナールの
お知らせ

妙高ゼミナール迫る！

９月９日（金）～11 日（日）は、妙高ゼミナールです。同封の別刷にて会場へのアクセス、送迎バス、一部企画の時間帯移動ついてご案内をさせていただきました。

なお、ゼミナールに関する情報は、先般お送りした要項の他に、学会ホームページからもご覧になれます。

http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/

****

全日本音楽教育研究会（愛知総合大会）

平成 17 年 10 月 13 日 (木)・14 日（金）

大会 1 日目［大学・短期大学部会］　主題『大学で教える音楽の行方』

http://www.oklab.ed.jp/neisi/16/ongaku/ongaku-kenkyu/zennichion.htm

◎会場：岡崎市「太陽の城」（名鉄：東岡崎駅北西約 500m，岡崎市明大寺本町）

○個人研究発表

○授業改善のための FD 分科会（8:30～受付，9:00～11:00）

・パネルディスカッションＡ：

「Curriculum Innovation in the New Stream of Faculty Development」

司会:　滝澤達子（愛知教育大）

パネリスト：Gary MacPherson (U.S.A)，John Roh (Korea),
Chan Cheong Jan (Malaysia)，奥　忍（岡山大）

大会２日目：全体会・シンポジウム・記念演奏

○シンポジウム『日本の音楽教育の現状とその行方』（9:55～10:55）

－－今，音楽科に何がおこり，その教育はどこに向かおうとしているのか－－

司会：村尾忠廣（愛知大会実行委員長）

シンポジスト：高須　一　（文部科学省教科調査官）

市川俊行　（東京都港区港南中学校・全日本音楽研究会中学校部会長）

坪能由紀子（日本女子大学）

○記念演奏（11:10～12:40）

特集　第５回アジア太平洋音楽教育シンポジウム APSMER　2005 シアトル大会報告

１）交流：アジア・太平洋地域音楽教育の交流 ーーAPSMER の過去，現在，そして近未来

APSMER 運営委員長　村尾忠廣

【APSMER の過去・現在】

第５回となる APSMER 2005 はアジアから太平洋を越えたシアトルで開催された。

（写真は左から，安田，村尾，村上，山下，疇地）

第１回のソウル（1997）に始まり，タスマニア（1999），名古屋（2001），香港（2003）そして今回のシアトルである。本当によく続き，発展してきたものである。振り返ってみると実に感慨深い。ルーツは 1992 年の ISME リサーチセミナー名古屋大会にある。このセミナーは全世界からわずか 25 名しか招待されないから，日本以外アジアからの発表者を受け入れる余地がない。それで，オーストラリアから初めて参加した Gary McPherson に声をかけて 100 名規模のアジア太平洋音楽教育の大会を開こうということになった。が，その後私が ISME のリサーチ委員長になるなど，もろもろの問題があって第１回の開催が遅れ，ようやく 1997 年にソウル大会を開催できたわけである。この時，Gary の提案にしたがって学会のようなものをつくらず，シンポジウム形式にして大会実行委員会にすべてまかせる方針をとった。が，実際には次期開催地の決定など誰かが運営の主体とならなければならない。そのため，振り返ってみれば，これまでは Gary と私が相談しながら運営してきたことになる。が，その Gary が ISME の会長となり，また，アメリカのイリノイ大学の学科長として赴任したため，今回のシアトル大会にはでられない，ということになった。こうなると私一人で決めなければならない。シアトル大会の内容は，実行委員長の S. Morrison と話しあいながら決めたものの，次期開催地を決めるための事前交渉など一人で進めてしまった。つまり，複数の候補が私のところに流れてきたものを私がかってに調整し，総会では 2007 年 APSMER はタイのバンコク，チュラロンコン大学で開催と報告，決定されたわけである。こういうやり方はもちろんよくない。やはり，運営の組織をつくり，合議して決定する必要がある。大会二日目，前大会の実行委員長の Jane Cheung と今大会の委員長 Steven Morrison に呼びかけ，APSMER advisory board member（運営委員会）と事務局の設置を提案した。

【APSMER 2007 バンコク大会と第１回 ISME Regional Conference】

APSMER 運営委員会は次のように決まった。

委員長：　村尾忠廣（日本）
事務局長・事務局：Jane Cheung（香港教育大学）
ASMER 2007 第６回大会実行委員長：
　Narutt Suttachitt（タイ）
Advisory Board Member
　Jiaxin Xie (中国)
　Gary McPherson（米国）
　Bo-Wah Leung（香港）
　奥忍（日本）

Magaret Barrett（オーストラリア）
Mei-Ling Lai（台湾）
Steven Morrison（米国）

さて，運営委員会の仕事の一つはISMEの地域大会をどうするか，ということである。これまでのAPSMERは「ISMEリサーチ委員会」の後援のもとに開催されてきた。しかし，ISME全体の地域大会，たとえば，PASMEというISMEアフリカ地域大会，ISME南米地域大会が開催されているし，今年はあらたにISME欧州地域大会がブタペストで開催される。当然，ISMEアジア・太平洋地域大会も開催されてしかるべきだろう。そうなるとAPSMERとの関係が微妙な問題となる。2001には，当時のISMEプレジデントがきわめて政治的に「第1回ISME汎太平洋地域大会」と銘打って「APSMER 2001名古屋大会」に対抗したことがあった。ISMEの理事でもあった私は苦境に立たされた。幸い，どちらの大会に参加するか選択を迫られたほとんどのオーストラリア，アジア地域の人がAPSMERの方に参加したのである。そのため，ISME地域大会は国内大会と同じようなものになったし，それゆえ第1回で消滅し，その後はいかなる「地域大会」も開催されていない。しかし，これまでにもニュースレターで紹介してきたようにISME の政治的状況は一変した。今は私と共にAPSMERを創設したGary McPhersonがISMEのプレジデントなのである。APSMERをこのまま残し，これを対外的にISME地域大会と読み替えても何ら問題はない。APSMER運営委員会のメール論議で，次期バンコク大会は「第6回APMSER」と「第1回ISMEアジア・太平洋地域大会」を「ISMEリサーチ委員会」後援のもとに並列表記することにした。APSMERはこれから香港教育大学を事務局とし，メーリングリストを立ち上げて会員を募ることになる。香港事務局は実質的にISME地域大会事務局を兼務することにもなって，Websiteを立ち上げる予定である。おそらく，年内には香港事務局からメーリングリスト入会の照会が日本音楽教育学会の皆さまのところに届くことだろう。音楽教育もいよいよ本格的なアジア・太平洋地域交流の時代である。

2) 第５回　アジア太平洋音楽教育シンポジウムに参加して

山下　薫子（静岡大学）

2005年7月14日～16日，ワシントン大学（米国，シアトル）において，第5回アジア太平洋音楽教育シンポジウム（The 5th Asia-Pacific Symposium on Music Education Research 2005, 以下APSMER）が開催された。テロ対策で厳戒態勢下にあった空港とは打って変わり，緑と水に囲まれた美しいキャンパスでは，女声合唱の柔らかな声が青空にこだましていた。

ワシントン大学キャンパス（村上康子さん提供）

３日間にわたるシンポジウムは，研究発表とワークショップ73本，パネルディスカッション３本，そしてポスター33本と充実したプログラムであった。

基調講演は，P. S. Campbell女史「太平洋地域の音楽，教育と文化」，N. Suttachitt氏「タイ音楽教育の歴史」，C. Yarbrough女史「音楽教育研究において重要なこととは」，H. M. Lenhoff, G. Lenhoff父娘による「音楽とウィリアムズ症候群」の４タイトルである。いずれもデモンストレーションを取り入れるなど，初心者にも理解しやすいよう工夫されていた。ただ，参加者の多くが音楽教育研究に携わる専門家であることを考えれば，もう少し突っ込んだ

議論が展開されてもよかったのではないかと思う。

研究発表について，「発表要旨の募集」（1月末締切り）の段階では，「アジア太平洋の国々における社会的，教育的，文化的文脈に関わる報告を求む」との指示があったが，統一テーマとしての拘束力をもつものではなかったため，結果的には生理学的，心理学的研究から民族色豊かな事例研究に至るまでバラエティに富む内容となった。その中で，日本人によるものが15本（18名）と，量的にも質的にも健闘していた。母国語以外での発表は，研究の構成や専門用語の意味を改めて問い直すよい機会となるものである。その他「音楽づくり」と「コンピュータの活用」に関する事例報告の数が多く，印象に残った。

パネルは，いずれも民族性の比較を目指したものであり，国際シンポジウムならではの醍醐味と言えるだろう。ただ，他の研究発表と同時並行の形で進められたため，興味あるパネルに参加できなかったことが残念に思われた。せっかくの機会であるから，基調講演と同様，全体会の形をとってもよかったのではないだろうか。

屋外での開催が予定されていたポスターセッションは，（シアトルに付き物の）突然の雨で，急遽室内で行われ，一所に大勢がひしめき合う結果となった。しかしそれが却って会場を活気づけ，75分があっという間に過ぎてしまった。研究発表とポスターを兼ねた発表者も多く，発表会場では十分に行えなかった議論の続きを楽しむ様子も見られた。ポスターという報告形態の面白さを再発見した瞬間であった。

ユーモアあふれる話術で参加者をひきつけた実行委員長Steven J. Morrison氏をはじめ，機器操作等に関して親身になって対応してくれた実行委員の諸氏，そして堂々とした司会ぶりが印象的だったワシントン大の学生の皆さんに，心から感謝申し上げたい。

次回のAPSMER（2007）は，タイ王国のChulalongkorn大学で開催される。今回の様々な出会いを温めながら，初めて訪れるアジアの地で，APSMER創設10周年を祝えることに，今からわくわくしている。

3) Finding the Forgotten Sounds: APSMER 05 雑感

今田匡彦（弘前大学）

〈文化〉ということばの胡散臭さは、恐らく〈耕す〉という動詞を、まったく連想させないところに起因する。〈culture〉は、つまり〈cultivate〉される土地に根付く、という成り行きが、日本語の表現からは皆無である、という訳だ。逆に、〈文化国家〉〈文化住宅〉〈文化包丁〉といったタームが、日本でしか耕されることがなかった、というのが、〈culture〉の摩訶不思議さを際立たせる、といった具合である。

〈Asia Pacific〉というタイトルを掲げた、今回で5回目となるこのシンポジウムも、開催地がアメリカ西海岸ともなれば、どうしても妙に楽天的な様相を帯びる。初日の基調講演者、米国ワシントン大学のパトリシア・シェーハン・キャンベルは、所謂マルチカルチュラリズムのスペシャリストとして知られている。"Road-Maps and Rest-Stops" と題されたスピーチで、彼女がシアトルという土地の多文化性を祝福すればするほど、マルチカルチュラリズムが、アメリカ合州国（衆は明らかに誤訳である）のメディアによって生み出された、一種の業界用語であることが炙り出される。政治、経済、文化を横断する〈グローバリゼイション〉が、米国式単一統合装置であることは、多くのポストコロニアリストたちによって既に指摘されて

いるところだ。そんなことは彼女もきっと承知しているに違いない。違いないのになぜ云えないのか、ポストコロニアリストたちの最近の視座が、非西洋圏での、〈分かっているのに止められない文化の捏造〉研究に移行していることを指摘しておこう。

さてさて、開催期間中、私が接した多くの発表が、必然的にアメリカ人によるものだった点は仕方ないとして、アメリカという土地で耕された音楽教育研究が、どうしてこうもアメリカ的に統一されているのか、という疑問の答えに至っては、もう「タマは猫である」のと同じだとしか云いようがない。例えば、作曲家ブゾーニが、音楽とは "sonorous air" である、と云い切るそのことばには、オーセンティシティを追求し尽した挙句の、一種の開放感が、在る。音楽という一つの事象を、ことばにより描写するためには、事象そのものの総体を、的確にイメージすることが大前提となる。あらゆる音楽教育研究は、音楽とは何か、という問いなしには始まらないはずである。イメージが、エクリチュール、或いは作品として固定される際必要とされるのが、技術である訳だが、多くのアメリカ人研究者たちは、イメージ→技術（ミメーシス）という基本原則の転倒、という極めて初歩的なミスを犯している。研究者自らの、音楽に対する真摯なイメージ化がないまま、技術（方法論）だけが陳列される。そこに示される技術（方法論）とは、形式、或いは様式とはまったく無縁の、空虚な体裁でしかない。思考の無いところに研究は存在しない、とただそれだけのことではある。

対極的だったのが、"On the significance of listening to sounds"と題された、阪井恵氏による発表である。例えば、〈構造的聴取〉を提唱したアドルノに象徴されるように、西洋近代音楽は、エクリチュールへの偏執により成立してきた。ブゾーニの云う、音楽とは〈空気中の響き〉に過ぎない、という指摘は、故に、音そのものへの回帰を示唆する。〈エクリチュール：構造〉と〈時間：記憶〉の対立、という音楽教育を思考する上で必要不可欠な現象を、阪井氏は、自らのことば（哲学）と実践により、見事に提示した。日本という土壌によってのみ在り得た研究ならば、〈文化国家〉もまんざら捨てたものではない。

国内トピックス

日本音楽表現学会と第３回＜アクアブルー＞大会

奥　忍（岡山大学）

日本音楽表現学会は2003年５月に誕生した，まだ若い学会です。学会の趣旨と展望について中村隆夫代表（現会長）は設立大会において次のように述べておられます。

「演奏・作曲など，音楽の表現に関わる人たちの数は音楽関係者全体の中でも圧倒的多数を占めると思われますが，現在それらの人たちが演奏以外で自らの研究成果を世に問う機会は非常に限られています。この学会を立ち上げた理由の一つがこの問題を改善することでした。しかしわたしたちはそれにとどまらず，多くの音楽表現者がこの学会に結集することで相互の交流がより活発になり，これまで思いつかなかったような新たな音楽表現の可能性が拓けることをも期待しています。」

2003年２月に作曲家，演奏家，音楽と音楽教育の研究者など音楽表現に携わる20名の発起人によって呼びかけがなされ，80名の会員で産声をあげた本学会は，現在160名の規模に成長しました。会員の研究成果は毎年６月頃に開催される「大会」と11月30日に発行される機関誌『音楽表現学』に発表されます。『音楽表現

学』については現在Vol.3の発刊を目指して編集作業が始まっています。大会については設立大会はエリザベト音楽大学で，第２回<ライラック>大会は北海道教育大学札幌校で，第３回<アクアブルー>大会は静岡県コンベンションアーツセンター・グランシップで開催されました。

さて，2005年７月2-3日に開催されたアクアブルー大会，会員数の２倍印刷した「大会要項」が不足するというハプニングまで起きました。のべ250名の参加者を得ています。オープニングは静岡大学大学院生，寺崎庸さん自作自演の弾き歌い「空と海」，基調講演はギニャール・旭西（シルヴァン・ギニャール）氏による「筑前琵琶の表現と技法―超自然描写をめぐって―」。ここでは琵琶の微細な表現とその意味について考えさせられました。続くシンポジウム「静岡の茶歌再創造と現代的奏演」では音楽創造と音楽する場に関する新しいコンセプトに接しました。

大会は，このようにして音・音楽に満ちあふれています。音楽表現学会の発表の特長は，音・音楽を用いることができるよう，発表時間が他の学会よりも長く設定されていることです。第２日には14本の研究発表と２つのワークショップ，１つのパネルディスカッションが行われましたが，どれをとってもこのような特長が生かされて，音楽と対照しながら具体的に進められ，出席者にとって納得できるものとなっていました。

このような特徴を持つ発表の典型例として，今大会では山名敏之氏によるワークショップ「モーツァルトのヴァルター・ピアノによるモーツァルト―ファンタジーKV475の演奏解釈―」を挙げることができます。山名氏は1782年頃に制作されたアイゼンシュタットのハイドンハウスにある楽器のレプリカを会場に持ち込まれ，ザルツブルグのモーツァルトミュージアム所蔵の兄弟楽器といわれるこの楽器について、制作の経緯，楽器の特徴について述べた上で，「ファンタジーKV475」を実演して，この楽器による演奏解釈の意義を提示されました。オリジナルな音楽を追究しようとする熱意と演奏技術の確かさによって立ち現れるこの作品の響きに，ぞっとするほどの美しさを感じたのは私一人ではなかったでしょう。

（山名敏之氏のワークショップで「モーツァルトのヴァルターピアノ」をさわってみる参加者）

来年の６月17-18日には第４回大会が岡山大学50周年記念会館で開催される予定です。音楽表現に強い関心をお持ちの方は，どうぞご参集下さい。なお，大会の愛称も現在募集中です。

連絡先：〒700-8530 岡山市津島中3-1-1
岡山大学教育学部奥研究室気付
日本音楽表現学会事務局
http://www.ipc.shizuoka.ac.jp/~eeakita/kitayama/OHG-index.html

会 員 の 窓

ニュースレターへの自由投稿のお願い

ニュースレターをもっと会員との双方向のものにしたい，と思っております。このコーナーでは，例えば「こんな本を出版いたしました」，「私の大学でこんな人事を公募しています」というような掲示板風の投稿でも受け付けたいと思います。 web 上での掲示板は，チェック機能が難しく，今も実現できておりませんが，ニュースレターなら可能です。エッセイ，学会への要望といった投稿でも半ページを目安に受け付けたいと思います。ニュースレターの編集者は毎回変わりますので，投稿は，学会事務局，もしくは，編集実務の担当者の E. Mail アドレス (tmurao@auecc.aichi-edu.ac.jp) へ送ってくださるようお願いいたします。

会員からの情報・ニュース

【音楽教員の公募】

会員より以下のような教員公募の案内がありました。

1. 所属：岡山大学教育学部
2. 職名・人員：教授 1 人
3. 教育研究分野：作曲・指揮
4. 応募資格
   (1) 博士の学位を有する者，またはそれに準じる者。
   (2) 年齢は平成 18 年 4 月 1 日現在，およそ 50 歳から 60 歳の者。
   (3) 研究業績は主要な作品，演奏，研究著書，学会誌またはこれに準じる論文の合計数が 40 点以上あること。
   (4) 音楽教育の分野において幅広い教育上の対応ができること。
   (5) 岡山市近辺に居住できること。
5. 採用予定日：平成 18 年 4 月 1 日
6. 応募〆切：平成 17 年 9 月 30 日（金）必着
7. 問い合わせ先：〒700-8530 岡山市津島中3-1-1
   岡山大学教育学部音楽教育講座主任　奥　忍宛
   （電話：086-251-7647，Eメール：s-oku@cc.okayama-u.ac.jp）

【芸術表現教育フォーラム　～子ども・遊び・アート～】

日時：　2005 年 12 月 17 日（土）　13 時～16 時
会場：　立教女学院短期大学　203 教室
内容等：　基調対談（河邉貴子［立教女学院短期大学］×佐藤　学［東京大学］）
分科会：　（３会場）と総括全体会

科研プロジェクトの一環として催される本フォーラムは，専門や立場，経験をこえて，芸術・表現教育やアート，子ども，遊びなどについて自由に論じ合い，学び合って相互の交流を深めようとするものです。

参加費は無料。テーマに興味・関心のある方，ふるってご参加ください。ただし，会場の都合上，先着200名にて締め切らせていただきます。ご了承ください。

参加ご希望の方は，氏名・所属（差し支えなければ）・連絡先（メールアドレス，住所，ＦＡＸ番号のいずれか）を明記の上，「芸術表現教育フォーラム参加希望」とお書き添えいたき，下記宛先までメールかＦＡＸにてお申し込みください。

Ｅ-mail：hyogen@ms.geidai.ac.jp
ＦＡＸ：03－5685－7799（東京芸術大学音楽教育研究室）
HP：http://www.geidai.ac.jp/labs/hyogen_forum
企画者：今川恭子（立教女学院短期大学），佐野　靖（東京芸術大学）

【タングルウッドシンポジウムII (2007) 準備委員会に出席】

小川昌文（上越教育大学）

7月14日から15日にかけてボストン大学にて開催された「タングルウッドシンポジウムII」備委員会に出席してまいりました。この会議は、MENC（全米音楽教育者会議）創立100周年および「タングルウッドシンポジウム」４０周年を記念し、アメリカの２１世紀における音楽教育の方向を探るために開催が予定されている「タングルウッドシンポジウムII」の企画会議であり、主催のボストン大学の教員３人を含む12人のメンバーのうち、アジア地域の代表の一人として参加したものです。

今から３８年前、１９６７年に開催された「タングルウッドシンポジウム」は、「アメリカ社会における音楽」(Music in American Life）というテーマのもと、当時のアメリカの第一級の哲学者、心理学者、音楽家を交え、１２日間にわたって基調講演とパネルセッションを中心に展開され、その後のアメリカの音楽教育に大きな影響を与えました。今回のシンポジウムのテーマは「世界共同体における音楽」(Music in Global Community)。メンバーはこのテーマをふまえて、今日における音楽教育の問題点や具体的なシンポジウムの構造や人事等について活発な話し合いを行いました。

アメリカで開催される音楽教育シンポジウムの企画に私を含め、ヨーロッパやアフリカの人が企画に加わるというのはアメリカの音楽教育の歴史の中でも皆無であり、今後の展開が楽しみです。今後のこの展開について、進展があり次第アップデートしたいと思います。

****

＜訂正＞

1）平成 17 年 6 月 30 日発行の『音楽教育学』第 35－1 号におきまして，発表者のお名前に誤りがありました。訂正してお詫び申し上げます。

P.22 北海道地区例会報告　研究発表１.
「個別の指導計画」適用環境下における音楽教育についての実践的検討～その２～
小出　學（北海道網走養護学校）

2）平成 17 年 6 月 30 日発行の，ニュースレターNo.20 に掲載されました「平成 16 年度修士論文題目一覧」に訂正がありました。

P.13 北海道教育大学旭川校
(誤）川本友紀　音楽活動におけるファスティネション
(正）川本友紀　音楽活動におけるファシリテーション

＜お知らせ＞

1）第２回常任理事会報告【報告事項】１（２）にありますように，今年６月より事務局員の就業条件を，労働基準法等に照らして整備いたしました。つきましては，事務局員の有給休暇にともない，下記の期間学会事務局を閉室といたします。会員の皆さまには，ご不便をおかけいたしますが，ご理解とご協力をいただきますよう，お願い申し上げます。

事務局閉室期間
2005 年９月８日（木）～９月 20 日（火）

2）第２回常任理事会報告【審議事項】６（１）の通り，個人情報保護の観点から，本号ニュースレターより,「会員住所・所属変更及び新入会員住所」の掲載を取りやめました。
ご了承ください。

編集後記

前号（第 20 号）より目次の統一が図られ，編集作業は格段とスムーズになりました。と言っても，実際は，編集の最終段階担当の村尾先生におんぶにだっこの状態。深く感謝いたします。

今回は時期的なこともあって，冒頭の「挨拶」は省略いたしました。会員の皆様に事務局の激務を理解していただくために，新事務局長の小山先生にひと言お願いしては，という声もあったのですが，表に出ることなく日々の課題を着実にこなすことこそ自分の役割ととらえる事務局長には，またの機会にお願いすることにしましょう。「海外トピックス」では，APSMER 常連の村尾，今田両先生と初参加の山下先生から，大変興味深い報告が寄せられました。また，「国内トピックス」の奥先生の原稿は，依頼したと思った瞬間にもう届けられていました。先生のエネルギーに脱帽！です。妙高ゼミナールと沖縄大会からの案内メッセージには，簡潔さとていねいさの中に，それぞれの実行委員の熱い思いが込められていると思います。ふるってご参加ください。

今回のニュースレターは，いくらかスリムなものになりました。会計的にはいいことかもしれませんが，広く音楽教育に関する情報を交換するという意味では，もっともっと会員の皆様方からホットな情報がほしい，というのが編集担当の実感です。いま，音楽と教育にかかわって，さまざまな形で改革が進められています。地域や学校の音楽教育に関することでも，また独法化された大学の状況，教員養成や専門職大学院のことでも結構です。従来の項目に当てはまらないものも大歓迎！項目の新設も，ニュースレターの活性化には不可欠ではないでしょうか。

（佐野　靖）

夏の花と言えば，真っ赤な「カンナ」。が，最近街を歩いていても目にすることが少なくなった。今なおうっとうしいばかりに咲き誇るのは「キョウチクトウ」。原爆後の広島でもすぐに咲きはじめた。切っても切っても増える。その生命力はもう厚かましいばかりである。通勤途中の道に紅白セットの並木があるが，紅白にすると，この厚かましいばかりの生命力が穏やかに見える。そう言えば，最近サルスベリも紅白セットで植えられているのをよく見るようになった。いずれも，猛暑のさなかに平然と花をつける。植えられたとしても立派に威容する。さて，10 月末の沖縄ではどんな花をみることができるだろう。今度こそ忘れずに沖縄植物図鑑を持ってでかけよう。

（村尾忠廣）

【日本音楽教育学会役員（2005-2007 年度）】
会長：坪能由紀子　　副会長：岩崎洋一・加藤富美子
常任理事：小山真紀（事務局長），佐野　靖・村尾忠廣（総務）
阪井　恵・島崎篤子・降矢美彌子（企画）今川恭子・奥　忍（会計）
岩井正浩（編集委員）
理事：寺田貴雄（北海道），宮野モモ子・井口　太・熊木眞美子・山本文茂（関東）
小川昌文・篠原秀夫（北陸），南　曜子（東海）
安田　寛・嶋田由美・若尾　裕（近畿），小川容子（中国），田邊　隆（四国）
木村次宏（九州）

【事務局住所】〒184-0015 東京都小金井市貫井北町 2-5-22 ハイツシーダ 1-102
【私　書　箱】〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26
Tel/Fax：042-381-3562　　e-mail：onkyoiku@remus.dti.ne.jp
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/index.html